

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

九島佳織

## 【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院 国際公共政策研究科

## 【研究題目】

民主主義体制の後退に関する理論的・実証的研究

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、どのような場合に民主主義体制が後退するのかという問いに対し、比較政治学の観点から新たな理論的枠組みを提示することである。具体的には、民主化の移行の形態に注目し、民主化革命後の統治者による民衆の支持に過度に依存した制度設計がその後の後退を引き起こすという仮説を示し、その妥当性を検証する。

1970年代後半以降、民主化の「第三の波」に伴い民主主義体制が世界的に拡大した一方で、その大半は体制の定着につながらず、クーデタや統治者の交代による権威主義体制への逆戻り、メディア統制や選挙不正など民主的制度の機能不全による権威主義的性格への変容が起きている。近年では後退(Backslide)研究として注目されているが、その多くは個別事例の研究に留まっていると共に、理論的には変数間をつなぐ因果メカニズムが明確に定式化されていない。よって、本研究による理論化は当該研究分野に対し貢献が見込めるといふ学術的意義を持つ。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は理論部と実証部から構成される。理論部では、民主化の移行の形態が民主主義体制の後退に与える影響のメカニズムを示す。その際には新興民主主義国家における民主化の議論や、民主化後も権威主義体制時の権力を持続しようという権威主義の遺産や後継政党の研究を参考にしながら、理論的枠組みを構築する。なお、本研究では「後退」の具体的内容について先行研究の定義に倣い、クーデタによる権威主義化、民主的に選出される統治者の追放に伴う権威主義化、民主的に選出された統治者の権力濫用の三点を想定している。

実証部については、計量分析及び事例研究を行う。計量分析では1974年から2010年までに民主化した国家を対象に、民主主義体制の後退に関する独自のデータセットを作成しプロビット回帰分析を行う。事例研究では、民主主義体制下でクーデタが発生し軍事政権が樹立したタイ、民主的に選出された首相を国王が解任し政権を掌握したネパール、民主的に選出されながらも任期中に戒厳令を敷き強権的な政治を行ったペルーを事例に、民主主義体制が後退する三つの経路がいずれも「移行の形態」という共通の変数によって引き起こされることを実証する。

具体的な作業としては、第一に、計量分析のためのデータセット作成である。三つの後退経路についてはフリーダムハウスやポリティの指標を頼りに時期を特定し、詳細な情報を既存の地域研究や各国の報道資料から網羅的に洗い出す。民主化の移行の形態については既存のデータセットを活用すると共に、民主化前後での閣僚及び国会議員の再任率を測定し、一つの指標として用いる。

第二に、事例分析で用いる資料の収集である。仮説のメカニズムである「政府が民衆の支持を必要としていた」ことや「政府が民衆の支持する政策決定を行った」ことを検証するために詳細な情報を収集する。国立国会図書館やアジア経済研究所図書館、インターネットアーカイブを利用する他、特に本研究の主軸となるタイの事例についてはタマサート大学及びチュラロンコン大学、国立図書館に赴き、音声データや政府刊行物を入手する。

【結論・考察】（４００字程度）

現時点での成果は、以下の二点である。第一に、計量分析において民主化の形態と民主主義の後退との相関が示された。この分析では自らが作成したデータを用いているため、現在はロバストネスチェックを行うべく代替となるデータの収集と整理を行っている段階である。

第三に、事例分析で扱うネパールとペルー、タイの民主主義の後退について資料を通じて知見を深めた。特にタイの事例では、タクシン政権に対する地方の圧倒的支持がクーデタの発生を引き起こしたことを実証的に示した。なお、タイの事例に代表されるような後退経路の一つであるクーデタについては、行為者である軍のフレーミングとの関連性を確認し、その成果を英文ディスカッションペーパーにて公表した。現在は、それを加筆修正し海外の査読付き学術雑誌への掲載を目指して準備を進めている段階である。クーデタ以外の後退経路については、引き続き仮説の精緻化及び妥当性の検証を進めている。